

平和の祭典から学ぶこと

柏原中学校 二年 中野 大志

この夏、パラリンピックが行われた。開会式での選手入場。二番目に入場したのは難民選手団だった。国旗にはオリンピックの五輪が描かれている。難民選手団とはなんだろう。私は疑問に思い調べてみた。

世界には、人種、宗教、国籍、政治的意見または特定の社会集団に属するという理由で、自国にいと迫害を受ける恐れがある為に他国に逃れている人々がいる。その人々のことを「難民」という。そして、武力紛争や戦争によって他国に逃れている人も含まれる。「難民選手団」とは、国や地域の代表としてオリンピックに出場できない選手に出場資格を与え、参加するために結成されたチームである。

今回、難民選手団としてブレイキンに出場したマニザ・タラシュ選手。彼女は競技中「アフガニスタンの女性を解放せよ」と書かれたマントを広げた。彼女の自国アフガニスタンでは、タリバン政権が実権を握っている。女性は、教育、スポーツ、音楽の自由が制限され認められていない。彼女はスペインに亡命し、難民選手団としてオリンピックに出場した。ブレイキンを続けるため難民となり、ようやく手にした出場権だが、オリンピックでは政治活動が禁止されているため、彼女は失格になった。失格になるとわかっているのに、なぜその行動をとったのだろうか。それは、自分は亡命したことにより、オリンピックに出場するという希望が持てた。しかし、自国にいる女性には自由がなく希望があると思えなかったのだろう。世界中の人々が注目しているオリンピックで、女性差別の現状を知ってほしい、そして、自国の女性には、自由という希望を持っていたほしい、という彼女の強い意志を感じた。

競泳で出場したシリア出身のアラー・マソ選手。彼は十五歳の時、内戦の続くシリアから亡命し、トルコやギリシャなど数か国を経てドイツにうつった。現在でも内戦は解決せず数百万人が家を失い、厳しい避難生活を強いられている。シリアの人々は、彼のオリンピックの活躍を見ることができたのだろうか。命の危険にさらされ日々生き抜くことに精一杯の中、オリンピックを観戦するのは難しいだろう。彼は「難民選手団として出場するということは、自分自身を表現でき、大観衆の前で泳ぐことができるのは、素晴らしいことだと思う。」と話している。きっと、「大観衆」の中に、シリアに残る家族や友人、多くの国民も含まれていてほしかっただろう。

難民選手団が結成されたのはリオ、東京に続き、パリで三回目だ。調べたところ難民という定義は、一九五一年に定められている。難民の問題は以前からあつ

たのに、たった二回前のオリンピックから結成されたのは、意外だった。リオオリンピックからパリオリンピックにかけて難民の出身国は変わっておらず、むしろ対象となる国が増えている一方だ。シリア、南スーダン、コンゴ、エチオピアからは、リオでもパリでも難民選手団として、出場している選手がいる。つまり、八年経っても、問題が解決していないということだ。難民選手団が結成され、実力のあるアスリートがオリンピックに出場できることは良かったと思う。しかし、それで満足してはいけない。全てのアスリートが自国の国旗を背負い、出場するのが本当の姿なのだ。そして、私が今回のパリオリンピックをテレビの前で家族と一緒に応援したように、世界中の人々が自国でオリンピックを楽しめるようになってほしい。そんな当たり前のことが、当たり前に行えることが、人権を守ることだ。今回、難民選手団について調べてみて、アフガニスタンの女性差別や、シリア、イラン、南スーダン、エチオピアなど多くの国々が戦争中ということを知った。家族を失ったり、自身にも命の危険が迫ったりと、選手それぞれに壮絶な過去がある。選手たちに共通しているのは「オリンピックに出場することにより、自国の現状を知ってほしい。」という思いだ。私たちにできることは、平和の祭典であるオリンピックをきっかけに、世界の情勢を、まずは学ぶことである。